

(10) 春のあけぼのーパン適性が高く、赤かび病に強いが？ー

平成5年に奨励品種になった「春のあけぼの」は、耐穂発芽性、製パン適性、赤かび病抵抗性が優れることがキャッチフレーズでした。「春のあけぼの」は、昭和55年に北見春31号と北見春30号を交配した雑種第一代に、北見春34号を交配したのから育成されました。北海道で最初に優良品種に認定された「札幌春小麦」(来歴不詳)以降、育成された品種の多くは、片親が外国品種または府県品種でした。時代によりその目的は異なりますが、当初は外国品種の有する耐病性や良質性を導入するために、また、1970年代以降は、「緑の革命」に貢献したメキシカン小麦が有する半矮性遺伝子(短強稈性)を導入するために用いられました。同様に、「春のあけぼの」の3親品種とも北見農試育成の材料に、メキシカン小麦を交配したのから得られています。

この交配を計画するに当たっては、何とか自前の材料同士の交配から、品種育成ができないものかという論議が行われ、多収の北見春31号、製パン性が優れる北見春30号および強稈の北見春34号が親に選ばれました。交配後、冬期間、温室で一作、石垣島(農林水産省熱帯農業研究センター)で一作の世代促進栽培を行い、13年後に品種として、陽の目を見ることとなりました。

「春のあけぼの」の耐穂発芽性は、現在でも育成材料の中ではトップクラスであり、実際栽培上もほぼ問題がない水準にあります。平成4、11年の2カ年の「ハルユタカ」と「春のあけぼの」のアミログラフの最高粘度を図示しました。小麦の品質上問題となるアミロ値300BU以下のものは、「ハルユタカ」が半数近くを占めるのに対し、「春のあけぼの」は1点だけです。また、製パン性も既存の「ハルユタカ」よりは、優れるという評価を実需者からいただき、さらに、国内のある団体から、是非、品種にし、買いたいという強い要望もありました。反面、収量性がやや劣り、成熟期がやや遅く、また、地域によっては、パン用としては十分な蛋白量にならない等の欠点を有していました。そのため、普及対象を比較的気象条件が優れる道央中部・北部、道北地域に限定しました。

